

私のお母さん

小学校六年

私のお母さんは生まれたときから手足に障がいがある。お母さんが今より若く、高松で働いていたころには、障がいは、まだそれほど重いものではなかったそうだ。しかし、今では階段などの段差で転びそうになることが多くなってきた。

日常生活の中で、お母さんはさまざまな人と出会っている。車から荷物を下ろす作業をそっと手伝ってくれる優しい人もいれば、中には「障がい者」ということを理由にして嫌がらせをしてくる人もいるそうだ。お母さんは、小学生のころから差別を経験していたと言う。自分のことを助けてくれる人はいたものの、一度ついてしまったお母さんの心の傷はなかなか消えることはなかったらしい。

お母さんは、だれかが手伝ってくれると、いつでもどこでもほんの少しのことでも、

「ありがとう」

と言う。人からいやなことを言われたときも、笑って聞いている。でも、みんながいなくなると、

「なんであんなことを言うのだろう」

と、悩んでいることもある。その姿を見てみると、私はそんな無神経なことを言う人に腹が立ってくる。そして、差別や偏見がすぐになくなるということとは難しいのだろうかと悲しくなる。お母さんの障がいはこの先もだんだんと重くなっていくだろう。以前と比べて、少し歩いただけで足が痛くなったり、夜になると足がむくんでしまったり、歩く速さが遅くなったりしてきている。それ以外にもできないことが増えてきている。でも障がいをなくすことはできないけれど、リハビリをがんばっているお母さんはすごいと思う。私も、少しでもお母さんのために何かできないかと思い、荷物を持ったり、食器洗いを手伝ったりしてお母さんを応援している。

私は、お母さんといっしょに過ごす中で、自分から行動することの大切さを学んだ。障がいのある人、困っている人に自分から話しかけることは緊張してしまうだろうが、その不安や緊張を取りはらって、自分から手助けできる人になりたい。